

東山七条―京都女子高校

五歳から結婚する二十五歳まで滋賀県の田舎町でくらししたが、高校は京都の京都女子高に通った。憧れていた中学の国語の先生が、系列の京都女子大学の国文科の出身だった。わたしもどうしても、京都女子大学の国文科に行きたいと思った。

通学には二時間かかる。朝五時半に起きて六時半の汽車にのる。今はもうめったに見ることもなくなったが、煙を吐いて走るあの蒸気機関車に引張られて走る汽車である。今から思うと汽車通学には何ともいえない風情があった。木製の車内は薄暗く、轟々と体に響く振動には人間的な力動感があった。

毎日十二時過ぎまで勉強していたため、どうしても睡眠不足になってしまう。汽車の中では立ったまま寝てしまうことがよくあった。いつも眠たかったし、いつも疲れていたよう

わたしの京都

河野裕子

に思う。帰りもまた汽車に乗って帰った。四時半の柘植行き。始発なので座ることができない。帰りの汽車の道中は、ほっとしたような疲れたさびしい感傷の時間だった。汽車は山科のトンネルを抜け、大津を過ぎ、琵琶湖の東岸に沿って走る。紫色に暮れなずむ比良山系。たなびき透き通る夕雲。金色にまばゆく照りはえる琵琶湖の水面。水際になだれおちるように菜の花がいちめん咲きひろがっていた。春愁ということばを覚えたのもその頃のことだろう。訳もなく悲しく、訳もなく胸から噴き上がるものがあった。車窓の景色を眺めながら、短歌のようなものを書いてはいたが、わたしには自分の感受性を表現できる技術がなかった。歌の話ができる友人も師もなかった。

田舎育ちのわたしには、京都はまぶしい街

だった。級友たちは別次元の住人だった。みんなが話題にしている「ウエストサイド物語」が何のことかしばらく分からなかった。

女子校というのがまた不思議な所で、当然のことながら、居るのは全部女子。一学年に二十何クラスもあり、高校だけでも三千人いる。これに小、中、短大、大学をいれると学園全体で一人人ちかく居たのではないか。

市電東山七条をおりて、東山の阿弥陀ヶ峯に向かつて二百メートルばかりの坂をのぼると学園がひろがる。この坂は、女坂とよばれてもいた。下校時間になると、坂の幅一ぱいになって、中学、高校生たちがおりて来るのぼって行くのはこれから講義を受ける女子学生たち。坂をのぼり下りする若い女性たちの群れは壮観だった。あの若々しい数の迫力を思うと今でも胸が轟くようなときめき

が蘇^{よみがえ}ってくる。この坂がのぼれず馬町の道からやってくる気の弱い男の先生もいた。

二年生のとき、ヘルマン・ヘッセの『デミアン』をよんで、ほとんど酩酊^{めいて}状態になっしまい、何の拍子にか小説まがいのもを書き始めた。妙な熱中癡^まがあつて、夜も昼も書くことばかり考えていた。授業中も休み時間も書いていたが、それを奇異に思う者はなかった。不思議なおおらかな学校で、何でもありの、誰でもありの、或る種^あのざわめきと華やきがあつたのは自由な私立の女子校の良さだつたのだろう。二月ほどかけて、三百枚ぐらいを書いた。使つた原稿用紙の表紙を何枚も貼^はり合^あわせて緑色の布で表装したときの感激^はを忘れることができない。

「現代国語」担任の木下京子先生をわたしは尊敬し憧れてもいた。小柄でショートカット、

目が生きいきと聡明^{そうめい}。焦げ茶色と白のチェックのジャケットもよくおぼえている。書いたものを先生の所に持つて行つた。迷惑されただろうとおもう。それから何年もたつて、先生は短歌を始められた。「未来」におられる高倉レイさんである。

二年生の頃は、そんな風に自分のしたいことだけをして過ごしたが、三年生になると受験から逃げられなくなった。わたしはどうしても女子大の国文科に行きたかつた。思い詰めて勉強はしていたものの体がついていけない。長距離通学と睡眠不足。加えて友達の問題があつた。二年生から同じクラスだつたのだがうまくつきあえない人がいたのである。親しい友人になりたかつた。お互いに好意はもつていたのに、なにかしらチグハグしてうまく行かなかつた。十七、八の少女というも

のは、お互いに求めるものが多すぎて、過剰な自意識に自ら傷つき苦しむ。毎日ひどくしんどかつた。そのことに気がつかない程に神経が張りつめていた。肩で息をしながら坂のぼり、授業中は寝てばかりいた。

教室で倒れ、診療所にかつぎこまれた。六月十八日のことである。学校から連絡がいつて母が迎えに来るまで、体中しびれたように無感覚になつてベッドに寝ていた。窓ごしに見ていた曇^{くも}り空のなかに揺れる葉桜の影を忘れることができな。その日からわたしはあの教室に帰ることはなかつた。一年間の休学を余儀なくされたのである。

ふつと湧くこの寂しさは何ならむ級友
らみな卒^そ入^いし教室に立つ時

(かわの・ゆうこ「塔」選者)